

第23回平荘小学校狂言発表会《NO.2》 子どもたちは、演じ切りました！

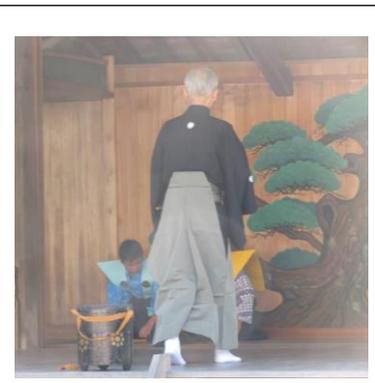


第23回平荘小学校狂言発表会が、始まりました。子どもたちの演目は、『附子』
 『柿山伏』『猿唄』の順に行いました。
 『附子』の演目の途中に、アクシデントが発生しました！『附子』を入れている葛桶の
 蓋が取れないのです！

約500人という観客の視線が集まる中、太郎冠者(役)は必至で蓋を取ろうとします。そして、次郎冠者(役)
 は、「向こうから吹く風に当たってさえ、滅却(めっきやく：消え滅びること)する大の毒(附子のこと)」を、
 太郎冠者に浴びせてはならぬと、必死で仰ぎます。しかし、蓋は取れません。

2人にとって、そして、6年生のクラスメイトにとって、山口先生にとって、
 教職員を含む全ての観客にとって、長い時間が流れました。

太郎冠者の素晴らしい判断！そして、太郎冠者と次郎冠者の阿吽の呼吸！
 2人は、劇を止めることなく、次の演者にバトンをつなぎました！



2人は、よく休
 み時間に自主稽古
 をしていました。
 業間休みも、昼休
 みも・・・。

演技後、「ふだ
 ん稽古していたこ
 と(『附子』の入
 れ物の蓋を取るこ
 と)ができなかつ
 たことが悔しい。
 失敗してしまっ
 た。」と言いまし
 た。失敗ではあり
 ません！見事な演
 技でした。

クラスメイ
 トも息をのん
 で見守りまし
 た。そして、
 応援しまし
 た。

山口先生からは、「大正解！咄
 嗟の判断ができています。」の
 声をいただきました。



目の前に無いものでもあるように伝える
 (表現する)のが、お芝居です。『柿山伏』で
 は、大きな柿の木が実際には目の前にはありま
 せんが、目の前にあるように表現しました。
 畑主の目線や、山伏が高ーい木の空から飛ば
 うとする場面等。『附子』は、葛桶を用いてい
 ましたが、アクシデントが発生した本番で
 は、『柿山伏』同様、蓋を取ったものとして演
 技をつないでくれました。演じ切りました！
 素晴らしいです。素晴らしい機転です！

地域からは、「演じ切りましたね。素晴らしいです。」と。



最初の場面が、『附子』の後々の演技に影響を与えます。精一杯演技ができました。



太郎冠者と次郎冠者は、主人から「向こうから吹く風に当たってさえ滅却するほどの大の毒」だと言われて『附子』の番をすることになるのですが、太郎冠者が「あの附子を見ようと思う・・・」と提案し、話が展開していきます。恐る恐る『附子』の正体を確認しようとしている太郎冠者や次郎冠者の様子を上手に表現しました。怖がりだけでも見てみたい二人の様子を「そりゃ退け、そりゃ退け。」「イヤこれこれ。」等、セリフと動きで観客に伝えました。



太郎冠者が『附子』を食べる場面では、次郎冠者が真剣に心配をしている状況をセリフや動きで表現したり、『附子』が砂糖だとわかった後の『附子』の取り合いを顔の表情や動きで表現したりする場面等、狂言のおもしろさを観客に精一杯伝えました。この日のために、子どもたちは、学校でも家でもたくさん稽古を積んできました。

そして、観客から笑いが起こったのは、笑いの場面の演じ手が頑張っただけではありません。今までの場面を演じてくれた仲間が、一つ一つ丁寧に自分の役割を果たしてくれたからこそ、大きな笑いが起こったのです。

